

近藤泰弘教授を送る

澤田 淳

近藤泰弘先生が本年度をもってご退職になる。この文章を書いている今も、いつもと変わらぬ優しい先生がお隣の研究室にいらっしゃる。

私にとって、近藤先生は、最も身近な同僚であると同時に、最も尊敬する研究者の一人である。先生に初めてお会いしたのは私がまだ大学院生の頃であった。先生は、日本語文法学会のシンポジウムのパネリストの一人として登壇されていた。シンポジウムの後、先生のもとに緊張しながら質問をしにお伺いしたことを思い出す。

先生のご専門は、コンピュータを使った日本語研究であり、第一人者として長らくこの分野を牽引してこられた。現在、国立国語研究所の日本語歴史コーパスが国内外で広く利用されているが、先生はその最初期のプロジェクトリーダーとしてその設計・構築に携わってこられた。また、古典文学研究者である奥様の近藤みゆき先生とともに、N-gram分析に代表される先端的なコンピュータ技術を用いた古典語の研究法やツールも開発してこられた。先生が真に偉大であるのは、日本語研究の発展のために、そのような技法を惜しむことなく誰もが利用可能な形で公開してこられたことである。先生の研究と教育は、常にそのような「開かれた」ものであったと言える。先生が世界の日本語研究者から尊敬される所以である。

先生は、コンピュータを使った先端的な日本語研究者として世界的に広く知られる存在であるが、先生はまた、膨大な文献資料を自在に操ることのできる「文献学者」でもある。古代から近現代にわたる文学作品はもちろんのこと、古辞書、訓点・經典資料、聖書に至るまで、その圧倒的な博学的知識は他の追随を許さない。私も先生の御著書・御論文を通して古典語の奥深さに魅了された一人であるが、先生の数ある御著書・御論文の中でも私がよく読み返すものの一つに、「古典語の統語法―「物語人称」を例として―」（『国文学 解釈と鑑賞』66巻1号、2001年）がある。その冒頭の一部を紹介してみよう。

近年の古典文法、特に平安時代語の文法研究の状況は、それ以前とはかなり違った様相を見せている。従来型の、いわゆる解釈文法を中心として歩ん

できたいわゆる「国文法」研究からすこし離れて、現代の言語学的理論をそのまま援用する形で、文学研究から自立して単独に存在できる記述文法としての古典文法研究が徐々に増加している。十五年ほど前までは、古典語研究には、テンスとかアスペクトなどの用語を用いることさえできなかったことからすれば隔世の感がある。私自身もそのような研究の傾向を助長してきた一人であると思うが、古典語と現代語とを比較対照して研究することによって、さまざまな統語論的知見を得ることが可能になり、古典語研究・現代語研究ともに大きなメリットがあるのは確かである。近年認知主義的な言語学が盛んになり、自立語の「辺（へ）」が付属語の「へ（格助詞）」に変化するような、いわゆる「文法化」（grammaticalization）の現象の解明についての興味が広がっている。これにより、現代語の体系の研究のためにも通時的な観点が必要であることがわかってきたことで、ますます今後現代語と古典語とを対照した理論的研究が必要となるであろう。

しかし、その半面、古典語を文学研究から切り離して研究することにより、古典文法研究と文学研究とが乖離する傾向が著しくなるといふデメリットが生じていることも否めない。これはどちらの学問にとっても不幸なことである。このようなわけで、今後の研究としては、理論的な手法を導入することのよさは生かしつつ、日本語の古典文学を普遍的な概念で説明できるような文法研究という目標を視点に入れることが必要になってくると考えられる。それによって、言語理論もより高度な段階に到達でき、諸言語の研究に有益な貢献をなすことも考えられるし、一方、文学研究にも有用な情報をもたらすことができるであろう。

そのような研究を進めるためには、現在、文学研究者がどのような情報を必要としているのかということを認識することが重要である。

（近藤泰弘「古典語の統語法―「物語人称」を例として―」『国文学 解釈と鑑賞』66巻1号、2001年）

先生は、研究においても、また教育においても、語学と文学との真の意味での協働を模索し、実践してこられたように思う。先生にとって語学と文学は「運命共同体」であり、一方の学問の繁栄と衰退はもう一方の学問の繁栄・衰退でもあるというご認識があるように思われる。先生は、語学と文学を待ち受ける険しい未来に警鐘を鳴らし、その試練を乗り越えるために、大学が、そして、学会ができることを模索してこられた。先生はときに学科会議の場においても、実際のエビデンスをもとにこの危機感を示してこられた。

そのような危機感の背景には、先生ご自身が身を持って体験された出来事があると言える。2020年6月にオンライン開催された、高校生主催によるシンポジウ

ム「高校に古典は本当に必要なのか」である。先生はこのシンポジウムにおいて、古典肯定派の急先鋒の一人として、古典否定派と対峙されたのである。シンポジウムの詳細は、長谷川凜ほか（編）『高校に古典は本当に必要なのか』（文学通信、2021年）に詳しいのでそちらを参照されたいが、先生は、人文科学や社会科学にあって自然科学にない知識構造とは、空間の多様性と歴史的变化の構造である点、人間が人間らしく生きていく上で、世界の広がりや歴史の流れについて洞察することが極めて重要である点、そして、古典語の教育は日本語およびそれによる文学の歴史を学ぶために欠かせない点などを強調されたのである。「たとえば、仮にエジプトで、ピラミッドは昔の王様の墓だし、潰して新しい立派なホテルでも建てましょうという話になったら、世界中の人が悲しみます。日本の古典もそれぐらいのものなんです。要するに世界的遺産です。日本人が日本で、ほとんど義務教育といえる高校の段階でみんなが古典を学んでいく、そして世界に伝えていくという義務があるのです。ですから学ばないでいいとか、どう役に立つというのは、そもそも論外です。そういうことは論じるまでもないとわたしは思っています」との先生のご発言からは、古典不要論に対する先生の率直な気持ちと古典への深い愛情が伝わってくる。後日、先生からこのシンポジウムについて伺いすることがあった。古典不要の声は非常に強いものであり、古典に対する風当たりは極めて厳しいものであったと述懐された。

ふとした折に、先生から関心をもっておられるご研究についてのお話を伺うことがある。その一つに、奥様のみゆき先生と二人三脚で進めてこられた「言語リソース」のご研究がある。先生とみゆき先生のいう言語リソースとは、ある時代や社会において構築された言語知識の集積体（アーカイブ）、すなわち、言語情報の供給源を指す。先生とみゆき先生によれば、たとえば、『古今和歌集』は、現代にまで継承されている伝統的な日本の美意識が言語として収容された日本文化の型の源泉（リソース）であるとされる。このような見方に立てば、表現の省略と美意識との結びつき、すなわち、省略の美学なるものも、余情（言外の情趣）を論じた平安時代以降の歌論が源泉（リソース）となって、文学論や日本語論へと継承されてきたものと見ることも可能かもしれない。

先生にとって、言語リソースとは、古典の重要性の再認識につながる概念であり、日本文学と日本語学とを高次につなぐ概念なのだと言える。日本文学・日本語学をいかにして次世代へと継承し、そして発展させてゆくべきか。来るべき難局を日本文学科はどのように乗り越えてゆくべきか。先生が示してくださった羅針盤をたよりに、残された教員とともに日本文学科の進むべき確かな道を模索していきたいと考えている。

研究者・教員としてのキャリアを歩み始めた最初期に先生と出会い、そして最も近い同僚として一緒にできたことは本当に幸運であったと感じている。研究、

教育、学内業務のすべてにわたって、先生から多くのものを学ぶことをできた。先生のご退職前に先生と一緒に書籍（『敬語の文法と語用論』開拓社、2022年）を上梓できたことも大変に幸せなことであった。先生はこれからも私たち後進の道標となってくださることだろう。みゆき先生も天国から先生のご活躍を喜んでいらっしゃるに違いない。先生のますますのご活躍とご健勝を心からお祈りし、先生をお送りする言葉としたい。